

序にかえて

探検部創設15周年にあたって

部長教授 杉原弘人

踏査第5号に探検部の10周年の巻頭言を書いたのは昨日のように思うのに、早くも15周年がやってきた。いよいよ探検部も青年期に入り、その活躍地域はカリマントン、フィリピン、アラスカ、オーストラリア、ブラジルなど世界各地となってきた。探検部創設の日もあさく、ニューギニア探検の夢をいだいて研究会が結成された時より13年余が立ったと思うと、歳月の流れの早さをつくづく感じる。初期の探検部は海外遠征を夢みての活動であり、まず、沖縄・八重山群島調査隊の結成で、第1歩を踏みだした。ついで、大学創立80年記念のペルー・アンデス学術調査隊の派遣で探検部の長年の夢は実現した。この数年間に、探検部は海底・民族調査隊をフィリピンに、民族調査隊をカリマントンに、海底調査隊をトラック諸島に、技研遠征隊をアラスカに、砂漠踏査隊をオーストラリアに、民族調査隊を南米アマゾンに派遣し、枚挙にいとまのない業績をあげている。目を国内の活動にむけると地底405mに達した青海千里洞探検の4年余の記録があり、また黒部源流にボートで挑戦した生死一歩前の記録もある。

探検部の活動は探査、調査にはじまり、その活動範囲の拡大と共に、ボート、海底、技研、洞窟、調査の各パートに分かれ、探検部は技術と研究の部となってきた。探検部の発表する調査報告は大学は勿論、一般の人々も非常な関心と興味をもって読まれている。探検部の活動は部員各人の体験として残るだけではなく、探検に関心をもつ人々に非常に役立っている。

私は探検部15年の歴史をふりかえる時、探検そのものの成果以上に“事故のない探検部”を誇りとしたいと思っている。探検は“さぐりしらべる”ことであるので、当然危険を伴う。この危険を逃れるには絶ゆまぬトレーニングと慎重な行動と注意力以外にはない。学生諸君の若さと情熱だけでは手のくだしようはないのだ。

15年の間には大学生気質にも大きい変化があり、探検部創設当時と同じとは言えない。団体活動を避け、トレーニングを厭う学生が多い中で、探検部に属し活動する諸君は安易に走り、困難を避け、興味本位で探検活動をするとは私は考えないが、無事故の伝統を誇る探検部のために部員、OB、顧問が一体となり、創設15周年を契機に伝統の維持に努めたい。

探検部も部員80名余の大規模なクラブの時代は終った。未来に向って発展していく探検部は少数といえども、どのような困難も克服し、強固な体力と意志を有する精鋭な諸君よりなる部として団結し、近づく大学創立90年に、また100年に、大いなる業績をのこしうる部になるよう努めようではないか。

(社会学部教授)

